写真1、馬駆の坂を台地側から見通す。正面に伸びる線は小山田の谷戸山。台地から丘陵地へ下る長坂からは、正面の緑と足下に広がる風景が印象的に映り、丘陵地の始まりを感じさせる。

写真2、馬駆を下ると昔ながらの家並みに出会った。見知った坂のすぐ脇にこんな場所があるとは！　歩を進めると、旧景と開発がせめぎ合う谷戸の現状を改めて実感させられた。

写真3、道の脇に沿う雑草ゾーンが宅地境を曖昧にし、ひと味違う風景を生み出していた。また、足元から下に広がる風景が町田には多いことにも気づいた。

丘陵地を抜けてきた芝溝街道が町田街道に向かって上る坂、その長い上り下りは、いやが上にも台地と丘陵地の境を実感させられます。またこの地は市域のほぼ中央に位置し、市内各地の地勢がぶつかり合い、切り替わる場所ともなっています。この、町田の「へそ」とも言える地をくりぬき歩きの最初として選びました。

行ったり来たり、上ったり下ったりの行程はまるでジェットコースター感覚。下に広がる風景もある、遠くの山も一緒に見る、同じ場所も見る方向で眺めはさまざまなど、新しい見方に気づきました。（約 5.0km）

写真1、山崎の谷を西側の丘から見渡す。住宅と緑が混在した風景。スカイラインの緑の間にシーアイハイツや山崎団地の住棟が見え隠れしている。

山崎川のつくる谷戸は、鶴見川に向いた根元の太い谷から細長い谷が何本も枝分かれするという変わった形をしています。枝谷戸は目立たず幹線も通っていないため、住民以外には分かりづらいエリアになっています。

山崎団地を始めとする大小さまざまな開発と、枝谷戸や丘上に残る旧集落の佇まいが複雑な地形の中で絡み合う世界を巡るまち歩きは、新旧の個性的な風景が入り混じり、景観としてはむしろ謎めいた印象となりました。（約 4.1km）

写真2、ミニ谷戸まるまるひとつを占める泉田寺。奥の庫と併せ、まちから隔絶した別世界が造られている。

写真3、忠生公園を横切る新道の橋脚。ここまで巨大になると、単なる温和感を超え、認めて受け入れてしまう思いも芽生えてくる。

山崎の谷ルート図
1/15000

写真1、わさび沢の谷を南側の高台から谷底に向かって見る。左端が町田市民病院。見渡してみると、家々で埋め尽くされているかのよう。

くりぬき12〈わさび沢〉

写真2、町田街道脇の崖下にある滝の沢緑地公園。わさび沢川の水源域で、昔から町田街道はこの湿地を避けていた。(③小世界の隠み)

写真3、尾根筋の旧道沿いに昔の佇まいが残っていた。うねる道の先の景色を想待しつつ歩みを進めた。(⑤つきあたりの妙)

町田街道は市民病院の先で大きくカーブを描きます。碁盤目の中町と木曽住宅の間に分け入るようにわさび沢川の谷が食い込んでいるからです。わさび沢の谷は現在、すっかり宅地化されていますが、山崎の谷と同じく幹線が通っていないため、住民以外には縁が薄く、市街地の真ん中にありながら小世界を形づくっているようにも感じられます。

現在その中央をバイパス道がオーバークロスしようと工事中です。開通後、見上げる住宅地として街の雰囲気がどう変わるか、隣の中町や木曽住宅も併せ歩きながら想像しました。

（約7.4km）

町田駅を囲む中心市街地は景観形成ゾーンのひとつ。町田でも最も人工的な環境なため、他の回とは視点を変え、通りの大小やその造り、通りと通りのつながりなどに着目し、小田急線の両側を東は文学館通りから西は中町の基盤目街まで巡り歩く景観まち歩きとしました。

実際に歩いてみると当初の見込みと異なり、「人（とその動き）」と景観の関係で盛り上がり、「人が居て初めて成り立つ景観」もあり得るのではという話にまで至りました。（約 3.7km）

原町田ルート図 1/10000

写真1、小田急東口のカリヨン広場。駅の地下道からいきなり街のど真ん中にポッと出る感じは、古くから広がりを持った街ならではで、町田らしい貴重なものに思える。

写真2、細い坂の上から見渡すと駅前のペデストリアンデッキがちょうど目の高さに見える。まるで舞台からまちという舞台を見ているかのよう。

写真3、基盤目街の大きい街区の中、かつて住宅街の佇まいが残る一角があった。

写真4、仲見世商店街を見下ろす。低い三角屋根で埋め尽くされた一角は、歩いてだけでなく、上から見ても特徴的な街並みになっていた。

くりぬき14〈金森段丘〉

写真1、先端で大きくUの字にカーブする切谷戸の上を新道が渡る。小振りな谷の上下にまちが広がる風景は、見ても歩いてもダイナミックだった。

金森付近で大きく蛇行する境川はその内側に幅広の低地を生み、町田街道沿いの台地と併せて、町田では珍しい「平らな」世界が広がっています。かつては低地と台地の間の段丘沿いに緑が続き、今でもその名残の緑が散在しています。今回は起伏豊かだったこれまでと異なる「平らな」景観を巡りました。

平らな中の起伏、旧道筋が伝える街並み、周囲と馴染んだ中小規模の団地、境川沿いの開発と以前の河道の関係など、これまでとは違った観点からの話題が続出しました。（約7.5km）

写真2、開発住宅地の中央に残された桜並木。訪問者の私たちには、地区の顔たる場所と印象深く感じられた。

写真3、境川に出て東を見る。右岸の家々は川に北面し、川に背を向けた建ち方をしている。せっかくの川沿い、眺めを取り込めば街並みも豊かになるのにともったいなく思えた。

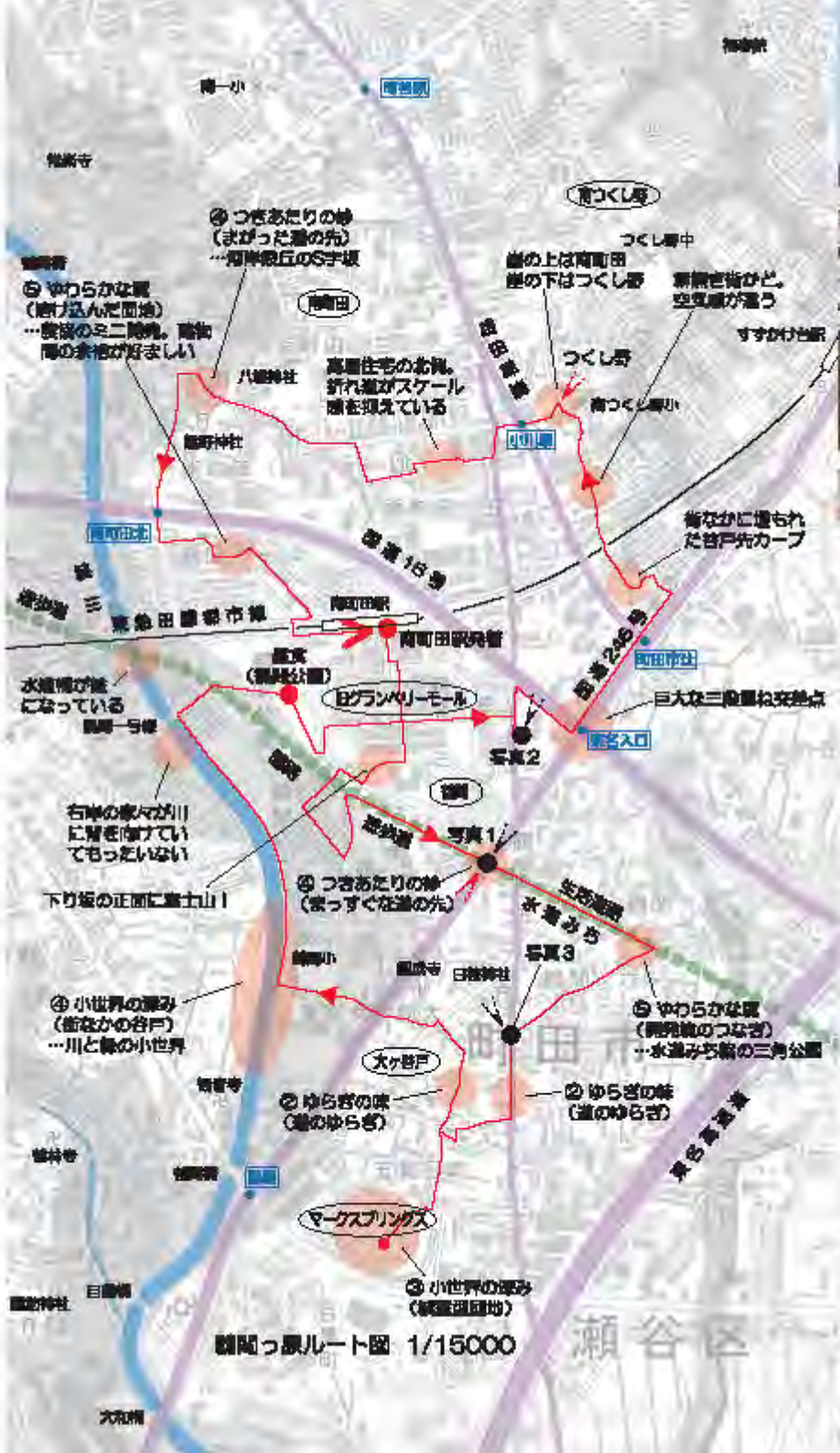


写真1、東名入口交差点。地上の交差点の上に国道246号と国道16号バイパスが跨ぐという三段重ねの交差点。柱脚が隠れて見えない国道16号は、まるで宙に浮いているかのよう。構造物の巨大さの良し悪しはさておき、かなり印象的な景観ではあった。

町田の最南に位置する鶴間地区は、国道２４６号に町田街道や国道１６号線が交わり、今や広域交通の一大拠点と化しています。一方、それら幹線で区切られた域内は、旧道筋が開発で寸断されつつも残り、新旧の街並みが混在したまま今に至っています。

３層の超立体的交差点、周りから隔絶した城塞型団地など、巨大建造物をどう考えるべきか議論となる一方、微妙にジグザグする旧道沿いの街並みから「ゆらぎ」という見方が面白いと盛り上がるなど、その後タネに発展していくテーマに数多く気づかされたまち歩きとなりました。（約8.8km）

写真2、町田街道から真っ直ぐ南へ鶴間地区を横断する旧道が、幹線道路に寸断されながら今も続いている。その道沿い、開発の狭間に一軒家がぽっこりと残っていた。小山から見渡すといやでも隔世の感を味わえる。

写真3、大ヶ谷戸を南北に貫く旧道沿いの辻。生垣が向かい合った佇まいはかつての街並みを彷彿とさせる。懐かしさと共に、まち歩きの中でほっとする場所でもあった。

景観のタネ

くりぬき歩きを始めた当初、メンバーは興味のおもむくまま、てんでんばらばらに立ち止まっては各自好き勝手に眺めたり考えたりしていました。ところが回を重ねるうち、歩く中でふと皆で集まり語り合う場所が出来るようになりました。お互いを知るにつれ、一緒にさまざまな見方から見てみたいと思えたのかもしれません。メンバーが引きつけられるかのように集まる様子から、いつしか「景観の引力」がある場所と呼び合うようになりました。

まとめの段になり、そのような場所たちを改めて見直してみると「似ている」「正反対」「見た目は違うけど同類では」など議論になり、整理してみた結果がこれからご紹介する７つの「景観のタネ」です。

この「景観のタネ」、私たちを含め市民の多くが住む地域の何気ない当たり前の風景がほとんどで、他所か

町田市民病院の最上階から見渡した町田西方の眺め。戸建て住宅、マンション、大規模団地などが混じり広がり、その向こうに多摩丘陵の尾根の緑が背景として伸びている。多々市民の多くが住む、町田市の景観計画でいう「住まい共生ゾーン」の風景の一例でもある。（P16 わさび沢）

ら訪れてきた人にわざわざ見てとは、ひいき目にも言いにくい場所です。しかし、これらは私たちが今まさに住んでいる市街地の中にあり、それだけに日々暮らす街並みそのものの景観を良くしていこうとするとき役立つかもしれません。また、街なかの日常の中にあるなら、市民にとって身近な、育てがいのある場所になりうる可能性もあります。私たちは、この「育てがいのある」というイメージから、景観の「タネ」と名付けることにしました。

日々暮らすありふれた街並みを景観という観点から見直してみようとするとき、視点として興味深いと共感していただけるか、ご一読いただければ幸いです。

その1

足元からの眺め

丘陵地を歩いていると見晴らしの良い場所に数多く出会いますが、中でも、立っている足元から遠景まで途切れなくつながり、見ている眺望そのものに包まれているかのような一体感や、足元から遠景までの前後の立体感が際立つ眺望がとても印象に残りました。単なる遠景ではなく、谷戸地形独特の遠近感や限られた視界がもたらす眺望は、多摩丘陵ならではの景観に思えます。

真光寺の斜面からの眺め：谷戸山の山腹から真光寺川の谷を見渡す。手入れの行き届いた斜面は下の母屋の庭、その先の住宅地、向かいの尾根の緑のスカイラインまでつながり、見渡している風景の中に包まれているような感覚がした。（P09 真光寺峠）

山崎町の坂道からの眺め：台地の端から山崎の谷に下る長い坂。眼下に広がるまちに飛び込んでいくように感じられた。（P15 山崎の台）

◆ 斜面からの眺め

足元の近景、その先の中景、背景となる遠景までがずるずるとつながり広がる大眺望は、一体感と立体感に溢れていました。

◆ 坂道からの眺め

新道でも旧道でも、長い坂の上から正面の街並みや谷戸山の緑を見下ろすとき、これからその風景の中に飛び込んでいくような感覚を感じました。

◆ 隙間からの眺め

高台では家々の間に小道や小公園への階段などが挟まっていることがあり、その狭い隙間から見える遠景が見渡せない分、より広がりを感じられて魅力的に思えることがありました。

金井ユズリハ公園入口の隙間からの眺め：斜面中腹にある小公園へ下りる階段の下に、日の出ヶ丘や鶴師台の住宅地が大きく広がっている。隙間の狭さと先の風景の広がりの対比が印象的だった。
（P12 パッチワークな世界）

その2
ゆらぎの味

景観計画では総じて、色、形、位置は揃っているほうが好ましいとする傾向を感じますが、ビル街はともかく、郊外住宅地にまで通じるでしょうか？　私たちは、揃い切っていないが、かといってバラバラでもない微妙なバランスに惹かれることがありました。その様子を「ゆらぎ」として意識すると、街なかにいろいろな「ゆらぎ」があると気づきました。ある風景が画一的でつまらないか、ゆらいでいて良いか、人によって感じ方が違うことも含め、興味深いテーマです。

千都の杜の屋根のゆらぎ：鶴川で最近開発された「千都の杜」住宅地を高台の公園から見渡す。屋面があまり見えず、三角形の屋根だけが連なっていて、その屋根は色合いの落ち着いた黒系、茶系、赤系が重なり合っている。（P10 鶴川盆地）

坂生にある南欧風意匠の建売住宅地の屋根と壁：壁や洋瓦の屋根は、茶系からオレンジ系の範囲内でまとめられている。メンバー間ではこの色彩について、均一的 vs ゆらいでいて良いと、評価が分かれ議論となった。（P14 鳥居の坂）

御嶽坐の屋根：小山町の御嶽坐に造られた新興住宅地。一面に広がる灰色の屋根について、均一に見える vs 微妙な色違いや陰影によってゆらぎを感じると、メンバーの評価が分かれた。（P05 多摩横通り）

四季の丘の道のゆらぎ：尾根幹道の北側すぐ、八王子市南大沢の「四季の丘」住宅地。エリア中央をゆらぎながら貫く遊歩道のため、規則的に並んでいるはずの家々がバラバラに見えた。（P05 多摩流浪り）

大ヶ谷戸の道のゆらぎ：鶴間の大ヶ谷戸を南北に貫く旧道沿いの風景。左右にゆらぐ道に沿って建物もさまざまな表情を見せる。（P19 鶴間っ原）

◆ 色や形のゆらぎ

特に新興住宅地で、屋根や壁が似た色合いの中で少しずつ形が違っていたり、似た形の中でいろいろな色が重なっていると、全く均一に揃っている風景より味わいを感じることがありました。

◆ 道のゆらぎ

特に旧道由来の道では、見通せるけれど一直線ではなく、わずかにジグザグしながら伸びている場所があります。道沿いの建物も少しずつズレて建ち、整然と並んでいるよりも親しみを感じます。

◆ 壁のゆらぎ

擁壁など道沿いに立ち上がった面が、ゆらいだ道なりにでこぼこしながら続いていると、ピタッと揃っているより柔らかみを感じました。

山崎の玉石擁壁：山崎町のとある丘の上、竹林を抜ける小道の先に玉石擁壁が残っていた。ゆらぐ道なりにカーテンのように出入りする擁壁の波なりは柔らかみを感じさせてくれる。（P15 山崎の谷）

その3

小世界の深み

起伏の豊かな町田では、小さな谷戸や開発から外れた場所が周囲から切り離され、市街化の進んだ今の街並みの中に独自の雰囲気を保ったまま埋め込まれていました。まち歩きでそのような場所に出会える意外性が楽しかったのはもちろんでしたが、くまなく均一に広がる街並みに比べ、普段見えている街並みの背後に思わぬ小世界が潜んでいると、その地域に奥行きや深みが感じられ、景観をより豊かなものにしているように思えました。

上小山田町の押越(おっこし)にて：切通しが作る影の向こうにまるで銭湯のような別世界が広がっていた。峰の谷戸の末端が尾根越しにすぐ裏まで伸びて来ていて、それが切通しを通じて短絡していたのだが、こうした奥へのつながりは、上小山田のまちそのものを、厚みや奥行きのある豊かなものに感じさせている。(P07 小山田郷)

小山町の片所谷戸：町田街道沿いの市街地と、丘上の多摩境通りの間の崖沿いに豊かな緑が残り、その中に自然な姿の谷戸が埋もれ残っている。一歩足を踏み入れるとそこは別世界。すぐ上に多摩境通り沿いのビルがあるとは分からない。（P05 多摩境通り）

大泉寺参道＆境内：下小山田町にある大泉寺は、小さな谷戸ひとつをまるごと占め、長い参道の先に森に包まれた境内がある。普段行き来する門前の道からは感じられない奥まりに、地域の奥深さを強く感じた。（P07 小山田側）

マークスプリングス：町田市最南端の南側に隣接する大規模団地。外周を高層棟で囲んだ中に低層棟を配し、南欧風意匠の小世界が演出されていた。周辺地域と区切られた個性的な団地を景観的にどう考えるべきか、大いに議論となった。（P19 鶴間っ郎）

◆ 街なかの谷戸

市街地の中に昔ながらの谷戸とその緑がぽっかりと潜んでいる場所がありました。地形に助けられ、中に入り込むと周囲の街並みが見えず、昔ながらの谷戸の世界にふと迷い込んだように感じられました。

◆ 隠れ里

小さな谷戸にすっぽり埋まるように、あるいは通りから外れた丘の上に、人通りを避けるかのように、里の風景が隠れ広がっている場所がありました。

◆ 懐かしい一角

市街地の中、建物から塀や垣根、小道具などがまとまって残り、かつての街並みを彷彿とさせる一角が今も維持されている場所がありました。

◆ 城塞型団地

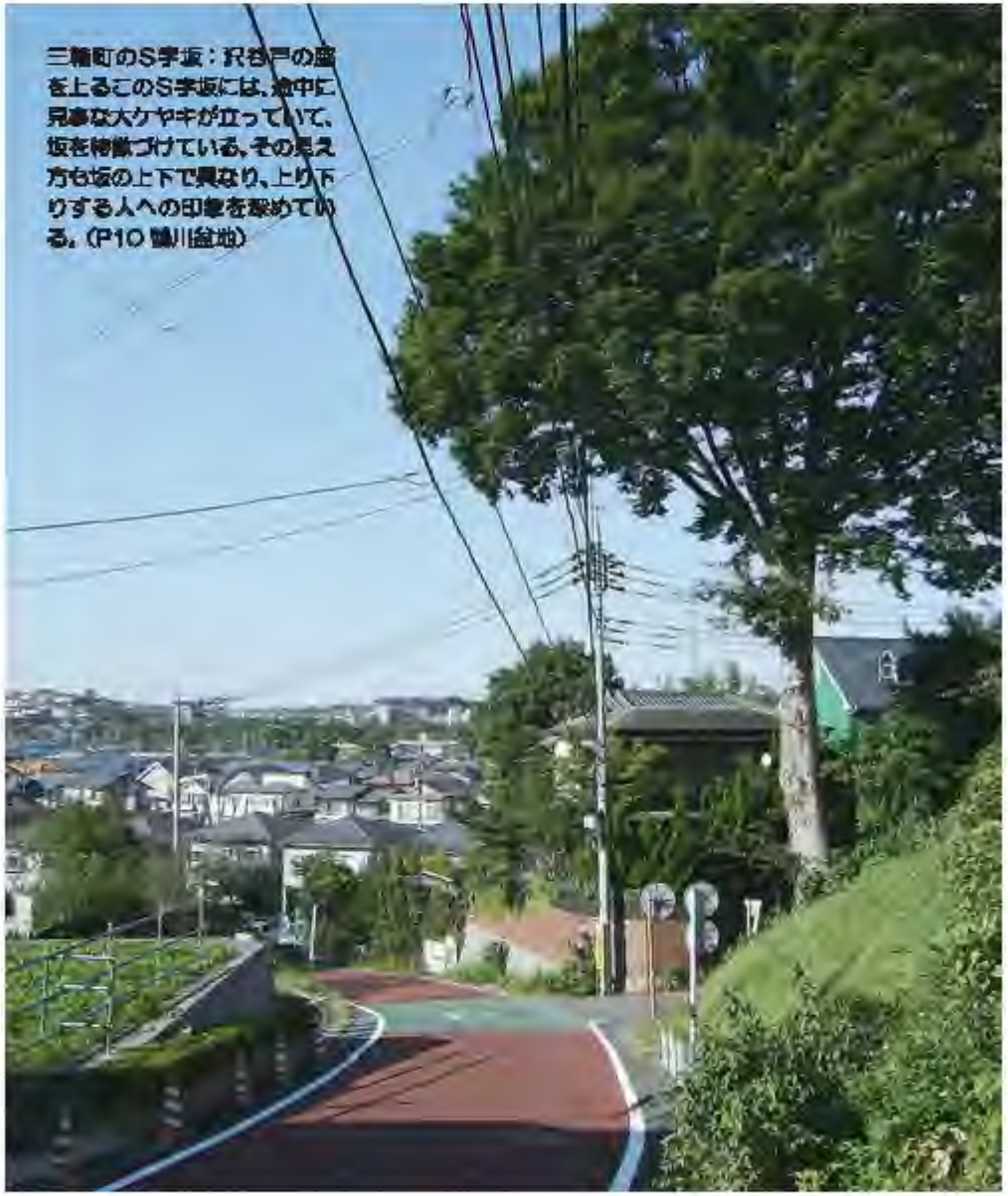
大規模な団地で、外周を高層棟で囲んで周囲と縁を切った上で内部に低層棟を広げ、独自のデザインテーマを持たせた個性ある団地と出会いました。景観的にどう考えたらよいか、評価は分かれました。

ターミナルロードのレトロ抜小路：かつて国鉄と小田急の町田駅と結び「蛍け足通り」と呼ばれたターミナルロード。その一角に懐かしい書体を用いた看板が残った、レトロ感漂う抜小路があった。人工的な世界だけに、こうした小世界が潜んでいると、景観的な豊かさが感じられる。（P17 旧町田）

その4

つきあたりの妙

丘陵地が大部分を占める町田では整然とした街区割りは少なく、道のつながりも複雑です。そのようなまちを景観を考えながら歩いていると、ついつい歩く先の正面の風景に関心が向いてしまいます。そして、つきあたりの佇まいが今歩いている通りの風景に大きく影響していると実感するとともに、まがった道やまっすぐな道の見えない先の風景が、私たちの想像を広げ、歩みを誘っていると気づきました。



三輪町のS字坂：RS戸の坂を上るこのS字坂には、途中に見事な大ケヤキが立っていて、坂を神秘づけている。その見え方も坂の上下で異なり、上り下りする人への印象を深めている。（P10 鶴川盆地）

◆ まがった道の見えない先

まがった道では、進むにつれ正面の景色が順ぐりに移り変わり、次々と現れてくる風景に、つい歩みを誘われてしまいます。その最たるものが、昔ながらの谷戸地形の風景。折れ曲がったり分岐したりしながら奥へ奥へといつまでも続く地形は、この先はどうなっているのだろうと、いやおうなく惹かれてしまいます。

◆ まっすぐな道の見えない先

まっすぐに伸びる道では、見える限り正面は空で先にある街並みは見えず、それだけに先が気になります。特に幹線道路では、身近な地域を越えた先につながる遠いまちに思いを馳せてしまいます。

◆ つきあたりの構え

つきあたりが建物か緑か、その建物がどう向いているかといった違いは、つきあたるその場所そのものより、むしろ今歩いている通り全体の景観を決定づけているように思えます。

鶴間のS字坂：八坂神社と熊野神社の間を上るS字坂。河岸段丘の縁で区切られた坂上のまちと坂下のまちが、上り下りするにつれ徐々に広がって見えてくる。平たい世界の中にあるので、なおさら印象的だった。（P19 鶴間っ原）